

学級文集にみる石橋勝治の「子供」観と教育観

——稗貫郡花城尋常高等小学校赴任当初を中心に——

土 屋 直 人*

(2004年11月30日受理)

はじめに

本稿は、青年教師・石橋勝治の、岩手における教育実践について、花城尋常高等小学校時代を中心に検討しようとする一連の論考の第一報である。

1911 (明治44) 年、気仙郡赤崎村に生まれた石橋勝治は、1931 (昭和6) 年3月に岩手県師範学校専攻科を卒業後、同年9月に気仙郡大船渡尋常高等小学校に赴任し、4年間勤めた後、1935 (昭和10) 年9月、稗貫郡花城尋常高等小学校に転任、同校に約1年半の間在職する。のち、上閉伊郡遠野尋常高等小学校に転出し、約2年間在職、1939 (昭和14) 年4月に東京に出る。そして、敗戦後の1946 (昭和21) 年4月頃から、石橋は四谷第六国民学校において「社会」の学習と生活指導の実践を行い、新教科・社会科の公的な開始に先んじて文部省とは異なる独自の社会科実践を展開した¹⁾。ここで一連の論考を通して本研究が試みようとするものの一つは、教育実践史という課題意識・観点から、この戦後「石橋社会科」の歴史的背景にあったもの、その土壌となっていたものは一体何であったのかを、石橋の教育実践とその思考過程の事実に即して明らかにしようとすることである²⁾。

果たして、「社会科教育の開拓者」³⁾といわれる石橋勝治は、この岩手での第二の赴任校である花城校に転任した当初、何を大切に考え、どのような実践を行っていたのか⁴⁾。そして、教師生活5年目になる当時、石橋はどのような「子供」観と教育観を持っていたのか。

石橋は後に、自らの著書『戦前戦後を貫く 民主教育実践の足跡』(日本標準、1972年、以下『足跡』と略記)の中で、自身の花城時代の実践を「生活教育と作文指導」と位置づけ⁵⁾、当時の教育の実際を振り返り、その実践意図を述懐している。だが管見の限りでは、こうした本人による自伝的・回想言説以外に、石橋の当時の教育雑誌論文や、現存する学級文集などの第一次史・資料を直接の手がかりとして、花城時代の石橋実践の全体像とその具体を実証的に吟味・考察する教育実践史的研究は、中野光や城丸章夫らの諸論考以外、これまでほとんどなされていない⁶⁾。

ところで、従前、昭和戦前期日本の「学級文集」に関する研究は、生活綴方実践史研究、北方教育運動研究等の領野において数多く蓄積されてきた。そして特に1990年代半ば以降には、学級文集に関する教育実践史研究の立場からの自覚的な研究が意識され、実際に行われてきてい

* 岩手大学教育学部

る⁷⁾。一方、1990年代に入って、白い国の詩編『北方の児童文集』（各県別、全6巻）や、日本作文の会編『戦前戦後・日本の学級文集』（全20巻）等において、昭和戦前期の学級文集の一部が復刻されるなど、全国各地の実践者による「学級文集」実践の未見領域が次第に明らかにされ、その研究が深められつつある⁸⁾。しかし、それらの復刻版の中には、何故か岩手・石橋学級の文集は収められていない。

かくして、一連の論考の初稿となる本稿では、石橋の戦前・岩手での第二の赴任校である、花城尋常高等小学校に赴任当初の時期（1935・昭和10年9月～10月頃）に注目し、当時の石橋学級の教え子の一人、高橋俊裕氏⁹⁾が保管する当時の学級文集の記述を紹介・検討することを通して、石橋が同校赴任後の最初の学級文集づくりに託した思い、そして、学級文集の記述から窺い知ることができる限りでの、花城赴任当初の青年教師・石橋勝治の持っていた「子供」観、教育観等を吟味、検討することにした。

なお、ここに明らかにしようとするのは、青年教師・石橋勝治の、昭和戦前期の教育実践の実際とその理念の片鱗であるが、それらは、現今及び今後の教育実践への有益なる示唆と、その再考への原理的な視座を少なからず含み込んでいるものと考ええる。

（以下、引用部分の傍点・ルビはすべて原文のママ。）

1. 青年教師・石橋勝治と「綴り方教育」

先ず、大船渡時代・花城時代を中心に、石橋勝治の略歴等を簡単に確認しておきたい（あわせて、下の【表1】を参照されたい）。

【表1】石橋勝治の略歴・抄（大船渡時代から花城時代まで）（未定稿）

年	年齢	月・略歴等	月・担任
1931 昭和6	21	3 岩手県師範学校専攻科卒業 8 短期現役兵除隊 9 気仙郡大船渡尋常高等小学校に赴任	9 尋常科2年
1932 昭和7	22	*郷土調査、郷土副読本作成、展覧会 *文集『慕進』（1号～5号（?））	4 高等科1年
1933 昭和8	23	*郷土調査、新聞学習 *文集『いのち』（1～7号（?）） *気仙郡の「進歩的教師」らによる機関誌『教育気仙』発行	4 高等科2年
1934 昭和9	24	6 北方教育社、花城尋常高等小学校にて綴り方講習会開催 *文集『ススメ』（1号～8号（?））	4 尋常科1年
1935 昭和10	25	（「真夏」）加藤将とともに池袋児童の村小、瀧野川小を視察 9 稗貫郡花城尋常高等小学校に転任 *文集『花城』（1号～3号）	4 尋常科1年 9 尋常科4年
1936 昭和11	26	2 県知事・石黒英彦、岩手県学務部、花城校に「総合視察」 3 花城小校長・三田憲、上閉伊郡遠野尋常高等小学校長に転任 *文集『花城の子供』（1号～9号）	4 尋常科5年
1937 昭和12	27	4 上閉伊郡遠野尋常高等小学校に転任	4 高等科1年

（『石橋勝治著作集 第7巻』（あゆみ出版、1984年）所収「著者略歴」、石橋勝治・佐々木方・佐々木勇『実践 遠野教育物語』（日本標準、1992年）386～388頁、等をもとに筆者作成）

石橋勝治は1931（昭和6）年3月、岩手県師範学校専攻科を卒業。同年8月、短期現役兵除隊（「弘前歩兵第三十一連隊短期現役満期除隊」¹⁰⁾）の後、同年9月、大船渡尋常高等小学校に赴任し尋常科2年を担任。翌年、翌々年には同校高等科1年、2年と持ち上がり、その翌年度は尋常科1年を2年度続けて担任した。こうして石橋は、1935（昭和10）年9月に花城校に転出するまでの4年間を大船渡尋常高等小学校で過ごした。とりわけ注目すべきは、石橋は、花城校転任直前である1935（昭和10）年の「真夏」、大船渡校の同僚である加藤将とともに、東京に「教育視察」（池袋児童の村小学校、瀧野川小学校）に行き、児童の村小で戸塚廉や野村芳兵衛らの実践を目にしていたことである¹¹⁾。これが契機となり、以後、雑誌『生活学校』への投稿が開始されることになる。

石橋は、1972年の自著『民主教育実践の足跡』において、大船渡時代の郷土調査、郷土副読本づくり、新聞学習、生産教育などの多種多様・多彩な実践を回顧し、その中で、既に大船渡で「絵と綴り方を『教材』として文集につくる」¹²⁾実践を行っていたことを指摘している¹³⁾。ただし、石橋は『足跡』の中の大船渡時代について述べている箇所で、「わたしも北方教育の思潮の中で綴り方の指導をした教師の一人である」と述べ、「北方」はその「後進性の故に多くの諸問題を持っていた」と指摘するが、「北方性と綴り方教育」との「結合」について、次のように言及している。「しかしわたしはこの問題は綴り方教育によってのみ解決できるとは考えていなかった。だからわたしは綴り方専門教師ではなかった。北方性はその特質の条件を持ちながら、教育経営全体として実践されなければならないと考えていた。したがってわたしは、学級経営、各教科の経営、学習組織、学習方法、自主的自治活動や生活教育の中で作文教育をするという立場であった。この本の内容の記述もそのような構造で描かれているのはそのためである。」¹⁴⁾

このように、回想の記述ではあれ、後の石橋が「わたしは綴り方専門教師ではなかった」と明言していることは重要である。「北方性」という「問題は綴り方教育によってのみ解決できる」ものでなく、「教育経営全体」を通してトータルに向かっていくことが大切ととらえる石橋は、それ故に「自主的自治活動や生活教育の中で作文教育をするという立場」を意識的に選び採っていたであろうことが想像される。そして石橋は、この『足跡』の花城時代を語る部分のほとんどを当時の学級文集『花城』と『花城の子供』からの引用から構成しているが、学級文集からの引用を以て自身の学級経営実践を語らせている理由の一つはここにあった。当時石橋が子どもたちと共に作っていた学級文集そのものが、その「教育経営全体」、「自主的自治活動や生活教育」の実践を自ずから語ってくれると考えていたのである。石橋学級の文集は、いわゆる「綴方文集」とはやや異質な、「自主的自治活動や生活教育」の足跡、学級での問題解決の足跡が現れ出る、一種の記録でもあった。

ここでは、石橋が大船渡時代に既に綴方教育実践と学級文集づくりを始めていたこと、そして、綴方教育実践を通して生活指導を行うこと、文集づくりを学級経営に生かし、「自主的自治活動や生活教育」の実践を行うという手法を既に意識し、実際に手掛けていたということ、この2点のみを確認するに止めたい¹⁵⁾。後に確認する通り、半農半漁の町・大船渡から、いわゆる東北本線「沿線」の町・稗貫郡花巻町に転任になり、その転任当初の石橋の実践への基本的な足場・志向は、大船渡での生産教育、郷土教育を中心とした実践から、綴方指導を通した学級文集づくり、生活指導を中核とする学級経営に、より力点を置く方向に転換していくことになっていたといえる。

石橋の第二の赴任校、稗貫郡花巻町の花城尋常高等小学校は、同郡の中心校といえる規模と内実を持った小学校であり、男子校であった¹⁶⁾。当時の校長は、郡下全般に「隠然たる大勢力」¹⁷⁾を有していたといわれる「自由主義者」¹⁸⁾三田憲であった。石橋が同校に赴任して約半年後の1936（昭和11）年3月、三田憲は上閉伊郡遠野尋常高等小学校長に「左遷」されるが¹⁹⁾、後に石橋は遠野校でこの三田の下、「遠野教育」²⁰⁾に参画することになる²¹⁾。

石橋が花城校に転任する約一年前の1934（昭和9）年6月、花城校校長・三田憲は、秋田の北方教師たちを受け入れ、同校を会場とする北方教育社綴方講習会の開催を許していた²²⁾。この講習会は、その後の岩手の生活綴方運動の「炬火」²³⁾となる。なお、この花城校には佐藤隆吉、佐々木文造、及川晃ら、県下に名の知れた綴方教師群がいた。ただし、彼ら綴方教師たちと石橋との関わりについては、管見の限り不明である²⁴⁾。

2. 花城校赴任直後の「學級に於ける轉任四日間の試み」

石橋の花城尋常高等小学校での実践は1935（昭和10）年9月に始まる。石橋は尋常4年男子組を受け持つ。時、石橋25歳という青年教師の時代である。この赴任直後の時点で石橋は先ず何を考え、何を行っていたのか。次に、花城校赴任当初の石橋の実践に着目しようとする意図から、同校赴任から約2ヵ月後の1935（昭和10）年11月に『教育論叢』と『生活教育』の両雑誌に掲載された論文「學級に於ける轉任四日間の試み」を取り上げ²⁵⁾、その記述をもとに、当時の學級経営実践の実際を確認してみたい。

花城校に「慌しく九月九日赴任」した石橋は、「たゞ新しい學校の子供の現實と、新しい土地の現實を見てその上に實踐を打ち立てようと思つたのです」と論文を書き出している。石橋が尋4男子の「十學級」という、年度の「中途から受け持った知らぬ土地の學級に、第一に手をそめたのは學級を読むことであつた。」それは、「はじめて教場へ臨んだ際の緊張、その日の生徒の生活の様子によつて概略を」読みとる「直観による読み」と、「調査」による読み、という「二種」であつた。この「調査」には「子供を中心とした社會家庭の調べ」と「學級に於ける子供が新しい教師をどう見るか」の2つがあつた。

先ず石橋は、「子供が、僕をなんと見たかを知る必要がある」と考え、文を書かせた。そこから、「此の學級の子供等は病氣の先生がいやなこと、種々と入れ替つて教へられるのがいやなことや、投げ放しにされてゐたことがはつきりとわかつて來た。」その以前、石橋が「直観」で読み取っているのは、「此の學級は、無統制であつて、子供等が殆んど散漫型化してゐる事であつた」。この「注意力がなく、學習態度が出來てゐない」理由には、「教師が、四、五人もかはり、前任者は病歟で、三ヶ月も補歟授業で押し通された學級」であり、「すつかり投げ放しにされてゐた學級」であつたという事情があつた²⁶⁾。

「五十八名中二名の級長を除いた外は、注意の持續力が五分と續かない。授業中であらうが、いつであらうが、悪戯専門で平氣であつた。」石橋は、「かうした子供達は、先づ生活態度を訓練されねばならない」と考え、「技術的實踐」として、先ず學級を4つの「分團」に分け、「いたづらグラフ」を作らせるなど、「悪戯學級への挑戦」を試みた。

「誰でもいたづらをして先生に注意されたら色ぬりをする」ようにした「いたづらグラフ」には、「自分で先生に注意されなくても、いたづらをした人は色ぬりをする事にしたら、誰もが、かくさずその日の放課後には色ぬりをして歸」るようになり、「まごまごして塗り兼ねる

風に見える子は、友人同志が立合つて塗つてゐた」。そして、

二日續けてやつて見たら三日目には、「僕が二日づづけていたづらをしたから、明日の三日目こそいたづらをしないやうにがんばらう」「ん、さうだ、おれも君には負けないぞ」といふ子供が出て來た。そこで私は、子供達に「さうだこのグラフを見て色ぬりをだんだんへらして行かう。色ぬりがなくなつてくれば、皆が立派な生徒になつて來た事になるんだ」と。子供達とみんなでがんばつて行かう、といふ事にした。以上これは着任第一の教育實踐である。²⁷⁾

一方、「掃除は十分位で切り上げて、雑巾は水にひたしたかどうかわからん位のもので、ざつと拭いて終りであつた」ような「掃除の亂脈」に対しては、「掃除グラフ」をつくり、「この間僕は、自ら上着を脱いでワイシャツの袖をまくつて、子供と一緒になつて雑巾がけをした。」そして、「皆で協働して働く時、怠けてゐる者はお互ひ同志で、戒め合つて働く様に」し、「働くことはよいくらし」という「働く標語」を掛け声にして「お互に力を入れながらはげむ」ようにしている。また、「餘りにも無統制な此の學級兒童は、教科書用具を忘れて來て平氣である」ばかりでなく「授業時間中、いたづらをやる、いつといふことなく『先生便所先生便所』といつて教室を出入りする」様であり、「これではたまらない」と思い「べんじよグラフ」「わすれものグラフ」に「色ぬりをすることにした。」

更に、「組の者で、けんくわしたら、『グラフ』に色ぬりをすることに」し、「『生活日誌』に『問題』として書いておくことにした。」そして「その問題は學級自治會で解決し、協働の力でけんくわを撃退することにした。」そればかりではなく、「けんくわした者同志」は「問題」について「けんくわのてんまつ」を記録し、「その記録を材料にして、生活をお互ひで検討」し、「そのけんくわの経過の具體的な事件に即して解決して行くことにした。」そして、「生活體驗及び學習を畫や文で製作されたものを、讀解させ批判させて、正しい生活へと進ましめるための材料」として「生活讀本」をまとめていく。

他方、「學級兒童の悪い事のみを拾ひ上げずに、よいところを見てのばして行く」ために「よいことグラフ」をつくり、「學級のためによいことをした、みんなの協働を前進させた、といふやうなよいことはみんな色ぬりを」し、「生活讀本の内容」とした。かくして、

學級を確實に自治的に組織するには、未だ氣運が熟さないで、起つた問題を中心にして組織づけて行かうとしてゐる。問題は又小黑板に書いて、その日の實踐方を各分團へ働きかける。〔。〕けんくわの問題も、遅刻の問題も、學級の問題として次に分團へ移行して共同責任とする。兒童は各自前日の自分より、よいか悪いかを比較して、互ひに話し合つてゐる。かうした實踐から入つて行かうと思ふ。²⁸⁾

このように石橋は赴任当初、新しい學級に臨んで、學級の様子を自分の「直観」と子どもたちへの「調査」から読みとり、それを考慮に入れて「技術的實踐」に踏み出すという方法を「間髪入れず」に取り組んでいた。そこでは、「いたづらグラフ」や「掃除グラフ」、「よいところを見てのばして行く」ための「よいことグラフ」などを「分團」毎に作成させ、「子どもたち相互のあいだに教育力を作り出そうとし」²⁹⁾ていた。その過程で、集團の中で個が直され、子どもたちが次第に自らの生活態度を自覺的に見直す契機を得、実際に少しずつ互いに自主的・意欲的に成長している様が論文からわかる。そして石橋自身「みんなががんばつて行かう」と心掛け、それを子どもたちに働きかけながら、分團や學級全体で「自治」的に「問題」の解決

に向かわせ、「協働の力でけんくわを撃退」せんとするなど、「自治」「協働」を生活訓練を貫く基本原理にしていた。同論文の結語、石橋は「飽くまで現実の子供の生活の上に立つて実践するつもりだ。」とその決意を書いている。

かくして、石橋は、大船渡校での4年間の実践経験とそこで育んだであろう信念を背景に、この時点で、「無統制」な子どもの生活の「現実」に立って、「生活態度」の訓練を目指し、「学級の問題」に「自治」「協働」を以て立ち向かう「組織づけ」を行っていた。

こうした、花城赴任当時の石橋の学級経営の実践意図と背景、その根底にある「子供」観・教育観、その指導方針がより鮮明かつ具体的に現れ出ているのが、次に検討する、これとほぼ同時期に発行された学級文集『花城Ⅰ』の記述である。

3. 花城校・石橋の最初の学級文集『花城Ⅰ』

石橋は、花城尋常高等小学校に1935（昭和10）年9月から1937（昭和12）年3月まで、約一年半在職する。この、尋常4年の後半（9月）から尋常5年の末までの約一年半の間、石橋学級では、『花城』『花城の子供』という2つの名称の文集が作られた。尋4の半年間の文集は『花城』、尋5の一年間の文集は『花城の子供』とそれぞれ名付けられ、『花城』は1号から3号まで、『花城の子供』は1号から9号まで発行された。

石橋の後の著書『民主教育実践の足跡』（1972年）では、教え子の一人であった菅原康平氏が保管していたという『花城』の2号と3号、そして『花城の子供』1号、5号、8号、9号を紹介し、それらの目次、及び記述の一部を引きながら、自らの当時の学級経営の意図と子どもたちの意識、問題解決への筋道を説明している³⁰⁾。

本稿で検討の対象とする『花城Ⅰ』は、石橋学級の当時の教え子の一人、高橋俊裕氏が保管されているものであり、石橋が花城尋常高等小学校に赴任した直後の「十月頃」³¹⁾発行された、学級を受け持って最初に作った初めての学級文集である。この『花城Ⅰ』の内容は、『足跡』の中では紹介・論及されていないものである。

本稿では、この『足跡』の内容を補う意味からも、花城での最初の学級文集『花城Ⅰ』にある「お父さんやお母さんの部」の部分の記述を具体的に追いながら、花城校赴任当初の石橋の「子供」観や教育観、石橋の実践意図などを確認してみたい。

(1) 『花城Ⅰ』の目次

学級文集『花城Ⅰ』の目次と内容は次の【表2】の通りである。『花城Ⅰ』（謄写版刷）は「お父さんやお母さんの部」（1-13頁）と「子供部」（1-?頁）³²⁾の2部からなるもので、その後、「学級新聞」「笑話漫画号」が文集の最後部に載せられ、文集末尾に石橋自身の筆になる「あとがき」が付されている。なお、「お父さんやお母さんの部」と「子供部」では別々に頁がふられている。また、「子供部」の各頁の下段には四角囲みの注意書きや説明文章が付されているが、これについて、「目次」の中では「しおり」と題され、「子供部」の各作文に対応する該当頁が示されている（【表2】の右半分の欄、参照）³³⁾。

文集の冒頭に置かれている「お父さんやお母さんの部」の記述分量は、文集全体の約2割であるが、この石橋の筆になる「お父さんやお母さんの部」は、後の『花城』や『花城の子供』の号には管見の限りでは見られないものであり、他にはない『花城Ⅰ』の特質の一つである。

これは、赴任して最初に石橋がつくった学級文集『花城Ⅰ』が、「子供」たちのためのものという性格のみならず、子どもたちの両親など家庭の人たちのためのものという性格をも持たせた、言わば二つの性格を同時に持つものであったことを表している。

ところで、同時代の綴方教育関連雑誌の文集評では、この『花城Ⅰ』はどのように評価されていたのか。千葉春雄は、その主宰する雑誌『教育・国語教育』の「文集談議」欄の中で、この石橋学級の文集『花城Ⅰ』について次のように紹介・論及している。

岩手縣『花城』稗貫郡花城校尋四石橋勝治氏編、「家でつよく心にひびいたくらし」「わたしたちのくらしの中から」「あだな」かうした分類をみたゞけでも指導者の見解がわかる。それに「お父さんやお母さんの部」があり、子供の文から育て方を考へさせようとしてゐる。最後に「しをり」がある。こゝには文集の使ひ方とか文のおけいことか漢字表その他文話が集められてゐる。かうした具體を持つことは何より力強い。文はよくそれらの具體に内部から應へ、至純に肥大してゐる。〔。〕³⁴⁾

「お父さんやお母さんの部」が、「子供の文から育て方を考へさせようとしてゐる」と千葉

【表2】『花城Ⅰ』の目次

▼花城 目次 1号			
お父さんやお母さんの部			
ボク	モノライフ子供	1 頁	
御家庭の皆様へ	石橋勝治	2 頁	
ひよつさり			
もけいひかうき	おたがひの問題	3 頁	
お父さんやお母さん方へ	石橋勝治	4 頁	
父と母とどちらが正しいか		6 頁	
——暢のばかまね——			
子供を持つ親へ		9 頁	
子供は			
大人は勝手			
子供を自立に			
事実と経験		11 頁	
子供の部			
家でつよく心にひびいたくらし			
兄さんの病氣	山口喜次男	2 頁	
お父さんの病氣	小原十五	10 頁	
おぢさんの病氣	高橋俊裕	14 頁	
家のこのごろ	阿部円行	21 頁	
僕の此のこのごろ	乙部敬一	22 頁	
わたくしたちのくらしの中から			
あだな			
僕のあだな	晴山純男	26 頁	
弟のあだな	瀬川孝雄	32 頁	
僕のあだな	阿部吉雄	34 頁	
くろねこといふ僕のあだな	照井幸吉	37 頁	
はくのあだな	岐亦俊美	39 頁	
いざり			
いざり	阿部寅美	42 頁	
にげ出した豚	堀籠 明	44 頁	
ちゅうもん	黒澤公男	48 頁	
僕のぶた	阿部敬治	48 頁	
お母さんの仕事	阿部 明	49 頁	
稲かけ	佐藤正次郎	50 頁	
すまふ	高橋計夫	51 頁	
すまふ	細川健三	55 頁	
しをり			
ぶんしうのつかひかた。		14 頁	
心にひびく文		21 頁	
くわしくかく		22 頁	
間ちがひなく見よ		25 頁	
家でのくらしをかく		26 頁	
きそく		27 頁	
つくったきそく		28 頁	
綴方作品朗讀會		30 頁	
生活讀本			
文のおけいこ			
かなちがひ		32 頁	
、や。のつけ方		33 頁	
「し」の使ひ方		33 頁	
十一月の生活と漢字			
空 天氣 季節		34 頁	
木草 田畑 山野		34 頁	
鳥 獸 魚		35 頁	
家庭 行事		36 頁	
學校		36 頁	
心			
感じ 動作		41 頁	
童話			
めくらと象		42 頁	
讀方仕合ひ		54 頁	
お話會		55 頁	
十學級野球大會		56 頁	
學級新聞		57 頁	
勉強のたね		58 頁	
紅葉			
柿			
障子			
ぬけてゐる言葉		59 頁	
學級新聞	學級総動員		
笑話漫画号			
あとがき	石橋勝治		

(『花城Ⅰ』の「目次」をもとに筆者作成)

春雄に評価されていることは注目される。『花城Ⅰ』は子どもたちのためにつくった文集ではあったが、その冒頭部分に石橋自身の父母に向けて書いた文章が入れられてあるように、ある意図を以て子どもたちの家庭に向けてつくったものでもあった。「子供の文」を挙げながら展開するこの「お父さんやお母さんの部」の記述からは、花城校赴任当時の石橋の指導意図のみならず、その「子供」観と教育観を直裁に窺い知ることが出来る。

(2) 「この文集のつかひかた」

次に、文集の表紙について、『花城』の2号、3号や以降の『花城の子供』には、その表紙に子どもが書いたガリ刷りの絵があるが、『花城Ⅰ』にはその絵が見られない。これは、後に子どもたちとともにつくる、あるいは子どもたちに自主的に作成を任せるという手続きをとった後の文集と対照的に、『花城Ⅰ』は教師・石橋が独自に、独力で作成したものであったことを象徴している。次年度の尋5『花城の子供』の後半の号では、一部の子どもが編集委員となり、子どもたちの手で学級文集が作成されるようになっていく。

石橋は、『花城Ⅰ』の冒頭（目次の前頁、文集の扉の部分）に、「この文集のつかひかたについて」と題する次の文章を書いている³⁵⁾。

- ☆この文集は君たちが一生けんめいで書いた文であるし又先生も一生けんめいにこしらへた文集なのです。どこまでもていねいにして持つて、よくよんで下さい。
- 君たちに一生けんめいになつてよんでもらつてもつともつと上手になり、くらしがよくなるやうにと思つてこしらへたものなのです。
- ☆この文集は綴り方の時間にはいつでも持つてきて下さい。そして綴方をかいてしまつた時やおやすみの時間にもべんきやうして下さい。
- ☆べんきやうのしかたは二回以上よんだら、下にかいてある問ひに答へたり、問題をかいたりするのです。
- ☆みなさんがよんでいいと思つたら、〇◎◎とつけて下さい。これはかきぶりの上手な人ば[か]り、とつたではありません。だれんのでまた問題になるのを取つたのです。よんだら實さいに行つて下さい。

これが、花城校赴任後に石橋が初めてつくった学級文集の、冒頭の文章である。文集の中の文を「よくよ」むこと、「一生けんめいになつてよんで」いくことを訴え、子どもたち同士の相互の評価を促すなど、学習の方法や視点・着眼点を提示している。そして、「二回以上よんだら」「問題をかいたりするのです」と指示し、文集に取り上げた文を選んだ根拠を「たゞ問題になるのを取つたのです」と述べている点から、石橋には、「問題」を取り上げ考え、させることによって、「問題」を学級全体で解決に向わせようとの明確な意図があったことがわかる。「よんだら實さいに行つて下さい」と述べて、「問題」について考えたことを実際に行動に移すことを促していることはその一つの証左でもある。

他方、この学級文集は、綴方が「もつと上手にな」るようというばかりでなく、「くらしがよくなるやうにと思つてこしらへたもの」であると述べられている点は重要である。しかも「文集のつかひかた」として、この文集は一つは「くらし」をよくするためにつくったのだと、子どもたちに向かってその作成意図と目的を直接語りかけている。この、学級全体で互いの生活を共によくすることを目指そうとする姿勢には、石橋の新しく担任することになった尋四の子どもたちへの愛情・情熱が仄見える。生硬ではあるが、一方、後の号にはない「下さい」という文末表現に新任教師らしい初々しさと配慮が感じられる。

かくして、この「使ひかた」の記述からは、石橋の学級文集づくりへの新鮮な想い入れが伝

わる。そしてこの『花城Ⅰ』は、先に雑誌論文に見た、自治的な問題解決、生活態度の訓練を目指した学級経営の、その手段の一つとしての学級文集であったことが窺われる。

4. 「お父さんやお母さんの部」の記述

以下、文集の前半部分の「お父さんやお母さんの部」の記述に注目し、その検討を通して、当時の石橋の「子供」観・教育観を探り、その学級文集づくりの真の意図を確認してみよう。（なお、『花城Ⅰ』からの引用箇所については、引用部末尾に頁数のみを記す。）

先述の通り、この最初の文集『花城Ⅰ』の「お父さんやお母さんの部」は、文字通り、父母らに向けて書いたものであることは、その記述の全体から容易にわかる。

(1) 「御家庭の皆様へ」

先ず、文集の冒頭の頁では、「お父さんやお母さんへ」という表題の下、学級のある子どもが書いた次の文を載せている。

ボク

(ボ) (ガ) (トウサン) (ヲ) (ツ) (シカラレマシタ)
ボクカオトサニ タバコ カテコイトクラレマシタ。

(イツテカツテキマシタ)
ハイトシマシタ。

(ヘリニ)
カイルニ、

(ゼ)
シニヲナクシマシタ。

(ア) (ン) (セ)
オカサニ ミシマシタ。

(ス) (ヒマシタ)
シリト ヨシヨシ ト イマシタ。(原文)

(1頁) (引用部のルビ、傍註・補註は原文のママ)

この子どもの文に対して、石橋は、そのすぐ下の欄外部分に次のように書いている。

これは四年の子供のかいた作文です。これまでに書いてくれたのでとてもうれしかったです。四年生になつて、これ位の子供が有るといふことを御存じですか。これでも自分の思ふことを言つてゐるから先づいいのですがこれまでも言ひない子供があります。まづものを言へるやうにしたいと思ひます。(1頁)

この記述は新任教師としての新たな決意を滲ませている。石橋が文集の冒頭にこうした文を載せた意図は何であろうか。それは、父母に対して「四年生になつて、これ位の子供が有るといふこと」、「これまでも言ひない子供があ」ることを訴え、受け持った「四年の子供」たちを「まづものを言へるやうにしたい」という教育方針と意志を述べんとすることにあったことは先づわかる。「自分の思ふこと」を「言ひない」子どもを「モノヲイフ子供」にすること、これが石橋が新しく持った学級をどうするか、そのねらいと願望の一つの表明でもあった。「自分の思ふことを言」うようにさせることは、無論、目指す「自治」の学級づくりにとって必要

なことであつたであろう。子どもたちが話したり書いたりして表現する生活を、そしてその書いた「自分の思ふこと」や考えを、「自治」の学級づくりの直接の動力と、見出すべき指導の見通しへの直接の手がかりにすることを考えていたであろう。だがそればかりでなく、「ものを言へる」子どもにするという目的は、教師に対しても「モノライフ子供」、即ち教師や学級の他の子どもたちに直接自分の考えを話したり書いたりしてくれる子どもを石橋が望んでいたことの現れでもあるといえよう。石橋は子どもの生活を、そしてその現実と地域・家庭の様子を、子どもの話や「子供の書いた作文」を通して知ろうとしており、実際にそうしていたことは次の記述からもわかる。

その次の頁には、「御家庭の皆様へ」と題する、石橋の次の文章がある。

御家庭の皆様へ

不肖石橋は九月に花城へ参りまして、知らぬ土地とは言へ、今まで御挨拶も致さず思ふ様な指導も致し兼ねてまゐりました。今後と雖も落度だらけの事が数多い事と思ひます。充分御援助下さいまして教育の効果をあげさせて下さいます様願ひます。

殆んど花巻を知らない私は御家庭の様子もわからず現在の私は毎日学校へ参ります子供の様子と話或は漸くにして書いてくれる綴り方によつてわかる位のものです。

何も知らない私が氣持ばかりは出来得るだけ務めるつもりでかかります。今私は皆様に私の教育の考や理論や専門の知識を申しのべやうとは思つて居りません。たゞ學級で指導する事をよく御了解下さつて、家庭でも子供の教育に努力して下さい様に願ひます。要は學校と家庭と子供とが協力してかゝらなければ効果は望めないものである事を思ひます。まだまだ子供等が家庭での勉強が足りないと思ひますから學習を充分やらせて下さるやうに願ひいたします。(2頁)

これは、「御家庭の皆様」への自己紹介を兼ねた、言わば父母への挨拶状ともいふべき文章であり、学級通信的な性格を持たせた文であるといえる。

石橋は先ず第一に、ほとんど「花巻」という「土地」や「御家庭の様子」について「わからず」「何も知らない」と謙虚に告白し、「子供の様子と話或は漸くにして書いてくれる綴り方によつてわかる位」と記す。子どもの話や文からその生活意識と現実、また親子の関係や子どもの家庭(学校外)での様子を見ていた様子がわかる。その意図・姿勢からは、花城の「子供」の背景について知ろうと試みる、青年教師らしい純粋な意志が窺われる。

第二に、それに尽きず、「學校と家庭と子供とが協力してかゝらなければ効果は望めないものである」と記していることが注目される。これまで「思ふ様な指導も致し兼ねてまゐりました」「今後と雖も落度だらけの事が数多い事と思ひます。」と率直に述べ、「何も知らない私が氣持ばかりは出来得るだけ務めるつもりでかかります。」と謙虚に言う一方、「充分御援助下さいまして教育の効果をあげさせて下さいます様」に、「學級で指導する事をよく御了解下さつて、家庭でも子供の教育に努力して下さい様に」呼びかけており、親や家族の配慮と協力、理解と援助なしには学校教育、学級経営はうまくいかないことを父母に訴え、それを願ひ期待する記述意図が窺える。ここに、後にも通低する、「學校と家庭と子供とが協力してかゝる」ことが大切だとする、石橋の教育観の一つの断面が既に現れていることに注意したい。

(2) 「ひよっきり」

続いて、「ひよっきり」³⁶⁾という表題の下、次の、学級のある子どもが書いた「もけいひかうき」という作文が載せられている。

もけいひかうき

此の頃次郎さんと正一さんが朝もけいひかうきを持って来て家の前でとばします。
此の間いつも次郎さんと正一さんがしてゐるのをうらやましくて見てゐます。

それでお母さんにたのんだら

「だんだんにかつてやる」と言ひます。僕はあいかはらずほしさうに見てゐますと此れを見かねたお母さんがなと思つたか

「次郎さん」と言つて、てまねぎして次郎さんと呼びました。

なんだと思つてついて行つて見ると、お母さんが次郎さんに一円さつをわたして「これでおれやの俊美さ二十五銭位のひかうきをかつてきてけで」と言つた。僕はその時とてもうれしかった。

それで次郎さんと、おほみやへ行つて

次郎さんがおほみやの人へ

「二十五銭ぐらゐのひかうき下さい」

と言つたら つるしてゐたのをゆびさして 「いいのをえらみなさい」と言つた。

次郎さんはいいのを取つて一円さつをやつたらつりが七十五銭來た。

さうしてかへりながら「こいつも七銭」だの「こいつ三銭」だの言つてゐる中に家へついた。さつそく家へかへつてとばして見たらとてもよくとんだ。

そしたら次郎さんが

「おれにもかして」と言つたからかしてやつたら、ぐるぐるプロペラをまいてゐたらぶつりとおとがした。

なんだと思つて音のした方を見ると、次郎さんがまつかになつてひかうきを持つてゐた。

さうして僕のところへ來て

「ゆるしてや」と言つた。

「なにしたの」と問ふたら

「ごむをきらしたからゆるしてや」と言つた。

「うん」と僕は言つた。僕はその時くやしくて泣きたかつた。

僕はきれたひかうきを持つて家へかへつて、此の間買つてもらつたこわしたのを持ち出して、ごむをとつてつけてとばしたら前よりも いせよくとんだ。

僕のその時までしかめづらだつたのが ひかうきがうんととんだのを見て わらひがほになつた。

(3-5頁)

この文に対して、石橋の次のような「評」を付けている。

評 買つてもらひたいと思つてゐたひかうきを買つてもらつてうれしかったでせう、しかしもつとかがへなければなりません。

次郎さんがこはしたのを「うん」といつてゆるしてやつたところは、よくありますね。

(5頁)

ここでは短く、「しかしもつとかがへなければなりません」と子どもたちに問題提起をし、「買つてもらつてうれしかった」ことの、その他面を考えることを促している。

そして、この「もけいひかうき」という文について、石橋は続けて、「おとうさんやおかあさん方へ」として、以下の7点を述べる文章を書いている。

おとうさんやおかあさん方へ

一、若し自分の子供の事ばかり考へて、他の子供様の事は考へてくれぬやうであつたら、それはよい考へたではないはずだ。

二、若し子供に「いつか買つてやるから」と言つて買つてやれる時はいい、でせうが、⁷⁷「若しもさう出来ない時は困つたものです。だから、とても買つてやれないと思つた時は⁷⁸「つらくても、よくそのわけを子供に話してやつて下さいませ [。]

- 三、よく考へて子供に買ひ物の練習とか、算術のおけいこ等にお金を持たせて買はせる事はよいでせうが「ただ不注意に子供に多くさんのお金を持たせる事は、考へ直して見なければいけません。」
- 四、子供に何かを買つてやる時、「名よ」とか「ぐち」のために買つてやることはきけんですからよく考へて見て下さい。
- 五、子供がとてもほしくてやりきれないといふやうになると、他の人の物をとるやうになります。子供が悪くなるのは自分の子供ばかりに罪があるのではなくて、ほかの子供やお父さんお母さんにも充分罪があるのです。
- 六、自分の子供がかはい、と思つて他の子供を叱る前にもう一度よく考へて下さい。
そしてその時自分の子供を悪い道へおとしこんでやるのが果して他の子供であるか、自分達であるかをよく間ちがはないうに吟味して下さい。
- 七、自分の子供がかはい、のでしたら、どこまでも間ちがはないう考へ方、見方、やり方を教へ、またやつて見せるのです。
自分の子供が悪くて苦にする人は、自分がわるいからだと思ひ、同時に世の中のお父さまお母様が悪いのだと、氣づいて下さい。(5-6頁)

この7つの文章では、子どもへの対応の正否を問い、「よく考へて下さい」と繰り返し訴え、父母にこうあってほしいということを見えやすく述べ、子どもに対する意識と対応、そして「自分達」の行為に自省を訴えかけている。

石橋は、子どもが欲しいものを「とても買つてやれないと思つた時」は「つらくても、よくそのわけを子供に話してや」ることが大切で、「子供に何かを買つてやる時」に『名よ』とか『ぐち』のために買つてやることはきけんであると注意を促し、再考を訴える。他方、石橋は、「子供がとてもほしくてやりきれないといふやうになると、他の人の物をとるやうにな」るが、このように「子供が悪くなるのは自分の子供ばかりに罪があるのではなくて、ほかの子供やお父さんお母さんにも充分罪がある」と一旦言う。ただし、「自分の子供の事ばかり考へて、他の子供様の事は考へ」ぬことは「よい考ではないはず」で、「自分の子供がかはい、と思つて他の子供を叱る前」に、「自分の子供を悪い道へおとしこ」むのが「果して他の子供であるか、自分達であるか」を「もう一度よく考え」よと直言する。こうして、「自分の子供を悪い道へおとしこ」むのは結局「自分達である」ことを自覚するよう訴え、「自分の子供が悪くて苦にする人は、自分がわるいからだと思ひ、同時に世の中のお父さまお母様が悪いのだと、氣づいて下さい」と厳しく書きつける。

石橋は、子どもが書いた文を題材にしながら、親たちに、子育てにおいて考えてもらふべき点を、子どもの実際の生活の姿をもとに語っており、千葉が評したように「子供の文から育て方を考へさせようとしてゐる」。そこには決して気負いはないが、石橋の、自己の想いを厳しく率直に言葉にしているところに、その主張への自信が仄見える。

また、続いて同じく、再び次のような子どもの文の紹介が続く。

父と 母と どちらが正しいか。どう教へたらよいか。

子供にどうひびくか

私がここへ書く綴り方は一番見てもらふに都合がよいために書いたものではありません。たゞてあたり次第に書いたのです。

おそらく、お父さんやお母さんと関係のない、子供の綴り方は、先づないでせう。

暢のばかまね

僕の家で一番下の弟の暢といふやつがあります。今は四つでとてもきかんぼうです。ずっと前にかづこが、目を悪くして病院から くすりをもらつて あらつてゐました。或日お母さんが かづこの目をあらつたかすをなげるのをわすれて おかろの所に置いたら暢がそこへ来て、お母さんが かづこに目をあらふのを まねして わたで目をこすつてのんだりして、そのまま あくを入れたりして外へあそびに行つた。お母さんが あとから おかろの所で ぬいものをしてゐると しうこ が

「だれか この かづこ が目を
あらつたかすに、あくをいれてるよ」。

と お母さんに言つたら

「ああ」と言つて、水でくりを入れるのをあらつた。

夜のごはんをたべる時 お母さんが

「だれかくすりを入れるのに あくを入れたり、くすりをのんだりした人はだれ」と言ふと

暢が 「おれだ」と半分食ひかけたごはんを ほたばたとおとしながら言つた。するとお母さんが

「ばかだな、目がうつつてぼんぼんが いたくなるんだよ」、と言つたら

お父さんが「だれだ、そんな子どもらのちようす³⁷⁾やうな所においたのは」と言つたら しうこが

「かあさんが」、と言ふと、

お父さんが お母さんに

「お前の方がばかだ」と言つた。

そしてそのあくる朝から暢が目がくつついて、あかれなくなつた。

それからもりをか病院に行つて來たらすこしよくなつて、今ではなほりました。

(6-9頁)

ここでは再び、「暢のばかまね」という、一人の子どもの作文を題材にして、それを取り上げながら「父と母とどちらが正しいか。どう教へたらよいか。」を問いかけ、更にそれが「子供にどうひびくか」と問題を提起している。

この作文に対して、石橋は、作文の引用部の下段に次の7点のコメントを付している。

- 一、この綴り方を読んで見て、子供はまづ正直なものであるといふこ [と] が言へるでせう。
子供が物をおぼえるのはたつたひとりほ [つ] ちで居ておぼえるのではなくて、必ずほかの子供か、大人の人のすることを見てゐて、まねしておぼえるのです。
だから子供はその家々によつてちがつてゐます。子供が悪いなら、まづ自分達が悪いのだと氣づいてから子供をなほして下さい。
- 二、わづか四才になる暢が目であらふくすりでいたづらをしてよいも悪いもわかつてゐるでせうか。
この子供はとてもりかうな子供のやうです。母が目であらつてくれるのを見てゐて、まねをする位、實行性に富んだ物おぼえのよい子のやうです。
- 三、暢が「おれだ」と言つたことは何と正直な子供らしさでせう。でも子供もちやんと、うそを言ひますよ。
- 四、お母さんが「ばかだな、目がうつつて、ぼんぼんがいたくなるんだよ」と言つた教へ方は、私は先づあまり 悪いやり方ではないやうに思ひます。
子供にすぐわかれるやうなうそを言つてはいけません。
- 五、お父さんが、「子供のちようすやうなところへおいたお母さんがばかだ」と話してありますが見方考へ方は間ちがつてゐないやうに思ひます。
たゞ問題は子供にどんな氣持を持たせるやうな聲で言つたか。その言ひぶりが問題だと思ひます。
- 六、親と子供の愛の関係をこはさないやうに話し合ってくれる事が最も望ましいと思ひます。
- 七、お母さんが自分が悪いと思ひながら親の権力で子供を叱るつもりでゐたつたら、それは大間ちがひでせう。

(7-8頁)

即ち、子どもは「まづ正直なもの」であり、「子供が物をおぼえる」のは「必ずほかの子供か、大人の人のすることを見てゐて、まねしておぼえる」ものであつて、それが故に「子供が

悪いなら、まづ自分達が悪いのだと気づいてから子供をなほして下さい」と、先に続いて再び「自分達」が「悪い」のだということを強調し、親に自省を呼びかけている。そして、「この子供はとてもりかうな子供」で、「母が目であらつてくれるのを見てみて、まねをする位、實行性に富んだ物おぼえのよい子」であると称揚するも、「正直な子供らしさ」の一方で、「でも子供もちやんと、うそを言ひますよ」と付言する。またそれに関連させて、「子供にすぐわかれるやうなうそを言つてはいけません」と訴えながら、「お母さんが自分が悪いと思ひながら親の権力で子供を叱る」のは「大間ちがひでせう」と注意を直言している。そして「親と子供の愛の関係をこはさないやうに話し合」うよう促す。

ここでは、先と同じく、文からわかること、窺われることを率直に述べ、自らの「子供」観を具体的に示しながら、それを基に石橋が自身の考えを父母に向けて訴えかけ、親への問題提起をしている。言わば、親の家庭における教育への注文、父母へのお願いとメッセージを語りかけ、教育の正しいあり方の再考を親に働きかけている。

(3) 「子を持つ親へ」

こうして、「御家庭の皆様へ」という文、子どもの作文の引用と父母への訴えの文に続き、「子を持つ親へ」「子供は」「大人は勝手」「子供を自立に」「事実と経験Ⅰ」「Ⅱ」「子供は」という表題の短文が並ぶ。

子を持つ親へ

私は私の學級の親様達へ話をしなければならないでせう。それは私があなたの方の子供様方を直接取扱つて居るからです。誰もどこの親も自分の子供が悪くなれかしと願ふ人は一も無いでせう。でも世の中には親のさうした願とは反対に悪の道へ向ふ者は数多いのです。この事実を見てどうしてだらうと考へない人がありましたらその人は多分自分の子供がどうなつてもいい方なのでせう。親が子供に善人になれかしと願ふのに子供は又どうして悪人になるのでせう。問題はそこです。然し斯う言つてもこの問題と事實は餘りにも大きくて直接に一偏に解決する事はむづかしいでせう。

そこで私は今の場合子供をどんなに見て行つたらよいかを一寸話して見たいと思ひます。御批正下さい。
(9頁)

このように、冒頭では、親の「願とは反対に悪の道へ向ふ者は数多い」という「事實」を挙げ、「親が子供に善人になれかしと願ふのに子供は又どうして悪人になるのでせう」と「問題」を投げかけ、「私の學級の親様達」に対して「子供をどんなに見て行つたらよいか」と丁寧に問いかけている。

そして以下、石橋自身の「子供」観、そして教育観を直接に述べる、次の文章が続く。

子供は

子供は大人と異つてゐます。体は大小声が太細といふでせう。然しそればかりではありません。若し大人が大人の考ばかりで子供を見やうとしたらそれはまちがひだと思います。子供は子供としての世界があり大人の想像のつかない所があります。だから大人が子供になつて考へて見なければなりません。たとへ子供になつて考へて見ても所詮が子供にはなり得ないでせう。

そこで子供が大人とは異なるならば子供は子供としてその年齢に相應して見なければなりません。大人が大人としての完成された考でそのまゝ、その規則を子供に押し賣りすることは危険です。

大人は勝手

大人は愚にもつかない子供の悪戯を心配したり若し子供が「どろぼうごっこ」をして遊ぶと大人になればすぐどろぼうになるものの如く考へて居ます。勿論そんな遊びが悪いにしてもすぐそれがどろぼうになるやうに出来てゐるものではありません。子供が例へば小刀でいたづらをしてゐると恰も、自分等がそんなことをした事が無いと言つたやうに叱りとばします。子供が悪戯をしたいやうに生れて来てゐるものです。その悪戯を危険でないやうに、又親もあまり損をしない程度にやらせた方が却つて子供のためになるのです。大人の職業と子供の悪戯とが同じであるのだといふことをお忘れにならないで下さい。

子供を自立に。^{ママ}

^{ママ}親や子供の事を心配ばかりして何もかも止めさせたり、子供に出来る事も親が萬事やつてくれる事は危険です。子供は自分の力で成す事を好むものです。子供にまかせてやらせれば子供は子供なりにやれるものであるといふ事を決してお忘れになつてはいけません。(10頁)

先ず石橋は、「子供は大人と異つてゐるからといって、「大人が大人の考ばかりで子供を見やうと」することは「まちがひ」であるとする。それは、子どもには「子供としての世界」があるからであり、だからこそ「大人が子供になつて考へて見なければならぬ」。ただし一方、「たとへ子供になつて考へて見ても所詮が子供にはなり得ない」という現実がある。したがって、逆にだからこそ、即ち「子供が大人とは異なる」からこそ、「子供は子供としてその年齢に相應して見なければならぬ」らず、「大人が大人としての完成された考でそのまゝ、その規則を子供に押し賣りすることは危険」であると警告する。即ち、「子供が『どろぼうごっこ』をして遊ぶと大人になればすぐどろぼうになるものの如く考へ」たり、「人は愚にもつかない子供の悪戯を心配し」て「子供が例へば小刀でいたづらをしてゐる」ことを「叱りとば」すことは、「大人」の「勝手」な思い込みであり、誤ったことである。それは、「子供が悪戯をしたいやうに生れて来てゐるもので」あり、「その悪戯を危険でないやうに、又親もあまり損をしない程度にやらせた方が却つて子供のためになる」からである。そして「大人の職業と子供の悪戯とが同じであるのだといふことをお忘れにならないで下さい」と訴える。こうして石橋は、第一に、「子供」観の転換を呼びかけながら、「大人は勝手」な考えを捨てるべきであると強調する。

第二に、親が「子供の事を心配ばかりして何もかも止めさせたり、子供に出来る事も親が萬事やつてくれる事は危険で」あるとする。なぜなら「子供は自分の力で成す事を好むもので」あるからである。こうして石橋は第二に、「子供にまかせてやらせれば子供は子供なりにやれるものであるといふ事を決してお忘れになつてはいけません」と訴え、「子供を自立に」向わせることの大切さを述べている。

とりわけこの、「子供は子供としての世界があ」るからこそ「大人が子供になつて考へて見なければならぬ」らず、「大人が大人としての完成された考でそのまゝ、その規則を子供に押し賣りすることは危険」であるとの指摘、そして、「子供は自分の力で成す事を好むもので」、「子供にまかせてやらせれば子供は子供なりにやれるものである」という指摘には、子どもへの信頼と尊重、自主や「自立」、自治の重要性についての石橋の信念が現れている。この最後の文章の表題が「子供を自立に」とされてあることに注目したい。

ここには、石橋の、後の戦中・戦後の実践に至るまで貫かれる「自治」の教育観の原型が率直に書きつけられているといつてよい。そして、こうした石橋の「自立」の教育観は、分団学習、「問題」の討議など「自治」「協働」の学級経営の諸相において、実際に大切にされ実践さ

れていたことは、先に検討した「転任四日間」の実践に見た通りである。

これに続き、次には、「事実と経験 I」「II」と題された、過去の自己の体験を自らの言葉で述べている文章が記されている。

事実と経験 I

私が高等二年を教へて居た當時の事です。或お母さんが私に、「家の子供がとても夜遊びばかりしてなりません。先生どうしたものでせう」と言つて来た。その子供は大して悪い性質でもないし勉強も出来る方であつた。私はすぐその母親に「お父さんはお酒を飲みますか」ときいたら「のみます」「それでは、家の人達が仲よく夕飯を食べたり話し合つたり、遊んだりしますか」と尋ねたら「いいえ、お父様が酒をのんで来ますので家の者達が面白がりません」と答へた。私は早速、「それでは子供さんが夜遊びに出るのは、或は當然ではないでせうか。出来得る限り、父さんに酒の注意それと同時に[に]家内の人々のむつまじい食事話し合ひ、遊び事でもして下さい」「私も學校で先づ出来るだけやつて見ますから」と言つてやつた。私は學校でその子供に「そんな家はどこにもあるんだ。それだからと言って家を出て夜遊んで歩いてゐるのは君の心が弱いからだ。家でみんなと楽しめるやうにしてください。お母様へも話してありますから」と言つてやつたら、その子供は間もなく夜遊びはしなくなつた。

II

是は私が尋常一年を教へてゐた時の事です。或日一人の婦人が「先生私の所の子供がどうも東京の家へかへりたいと話して困りますが、そして死ぬ、死ぬでもいい、から東京の家へかへりたいと話して困りますが先生どうしたものでせう」と言はれて私は「そのお話はまだ合点がありません。あなたの本當のお子様ですか」と問ふたら「実は貰ひ子です」「活動を見に行きたいと言ふし、連れて行けばセンチになるし、餘り暴れ過ぎて乱暴ですし、それを止めろといへば家へ入つて死ぬ、死ぬのがこはくないと言ひますので本當に困ります。東京の親が本當の親はおれだと話したらしいのです」と言ふ話であつた。私は「このお母さんあまり子供の事を心配し過ぎる。子供の伸びる力や、子供らしい遊びもさせないで心配さのあまりちぢめておくからだ」と思ひましたから「あまり子供の事を心配なさらない方がいいでせう。活動寫眞も見せて下さい。他の子供と一緒にうんとあばれさせて下さい[。]。今にお父さんが釜石からかへつて来たらなほるでせう。」と話して、その通りやらせたら、お父さんがかへる頃にはすつかりよくなつたと言つて来た。

その子供は素晴らしい頭の持主であつたがいづれ二十日ばかりでよい子供になつた。

(11-12頁)

これは、先の「子供は」「大人は勝手」「子供を自立に」の論旨を敷衍し、その具体例として自身の「事実と経験」を挙げて説明しているものと読める。「事実と経験 I」は、石橋が教師になって3年目、大船渡尋常高等小学校で高等科2年を受け持った1933(昭和8)年度の、そして「事実と経験」のIIは、その次年度に尋常科1年を受け持った1934(昭和9)年度(あるいはその翌年度)の出来事を述べているものと推察される。これまでの大船渡時代、石橋が直面した子どもの「事実」と、石橋自身が母親に働きかけてきた「経験」を実践の中のエピソードとして語っている。この中では、子どもへの具体的対応を示しつつ、親に生活態度を改めることを求め、またその意識の転換を迫っており、問題解決の結果を挙げて従前の行論を補強している。特に、「子供の伸びる力」を信じること、子どもへの信頼と尊重を述べていることにも注目したい。ここには、石橋が日々の「経験」の中から理論的ともいふべき指導への筋道を見出し、実践を打ち立てていた様が見える。

続く「子供は」と題する文章では、これまで述べてきた石橋自身の「子供」観、子どものかかわり方と教育への方途を、アフォリズム(箴言)のように述べている。

子供は

言ふ事をきかないで暴れる子供は
たゞ無茶で乱暴でいがみ合ふ子供は

学校へ来て、むやみに暴れ廻る子供は、

子供が物事をきいて来たら、

子供のした仕事はよくなくても、

大人が考へて大切でありもつともな事であつても子供にとつては大した事でもなく、さつぱり問題でもない事が多いのです。子供を罰していゝ理由は二度とするなどのみこませることだけだ一つです。

ひとりで仕事をさせるとどんだこまでもやります。
家の人達同志でけんくわをしたり、いがんで見せるかつの
つき合ひをした家の子供の様に思ひます。
家であまりげんかくなしつけをされるか、うちの人たちの
仕事が無茶に暴れ仕事か、兄弟が多いか母がだらしないか、
の家庭である。
うるさがらないでどんな事でも真剣になつて話してやるこ
とです。相手になつてやることです。
よいところを見つけてほめてやる事です。あまり悪いこと
を強く言はぬ事です。

(12頁)

この、「言ふ事をきかないで暴れる子供は」「ひとりで仕事をさせるとどんだこまでもやります」との文言にもまた、「子供」の尊重、子どもへ信頼の上に立った石橋の「自治」の教育観が明瞭に現れている。「子供が物事をきいて来たら」「うるさがらないでどんな事でも真剣になつて話してやる」、そして「子供のした仕事はよくなくても」「よいところを見つけてほめてやる」、これらが石橋が父母らに期待した教育の具体的方策であり、また同時に、石橋が自らの実践の中から考えてきた教育の基本原則、石橋が大切にしようとする教育の姿の内実の一つであつたといつてよいであろう。こうした、率直に自己の「子供」観と教育観を述べている、一連の親たちへのメッセージともいふべき文章から、石橋自身の教育信念の内実が知れる。そも、こうして自説を明確に真正面から書くところでは、教師としての見識と、これまでの実践への姿勢が直に問われよう。その意味で、青年教師なりに、「親様達」に向つて堂々と自説をこのように書きつけているところに、石橋の、これまでの実践の「事実と経験」に裏打ちされた自信と自負が見える。

(4) 石橋の「統制」観

かくして石橋は、「お父さんやお母さんの部」の結びとして、「統制」という興味深い表題の文章を書いている。ここで石橋がいう「統制」の真義とは何か。

統制

私は皆様に前の様な事を書いて誤解されましては、と思つてつけ加へます。

以前私は子供の事をよく考へてくれるやうにといふことを書きましたが、決して、子供を勝手にさせ或は放任することの意味ではありません。私等の仕事は子供の心を殺さないやうに考慮して正しい教育の目的に向つて統制して行くのであります。ですから私は勉強しない子供が有れば、出来得るだけ、子供に勉強の大切なことも教へ理解させて学習にも努力させる様に仕向けます。

けれども私は子供の眞の姿をも省みないでたゞ子供に必要性のないものまでも惨酷に押しつけたり、強押しやうとは思ひません。

たゞたとへ子供で有つても知つて置かなければならぬやうな規則作法は極力覚えさせるやうに努力します。子供相應に最も合理的によく学校や世の中の進歩におくれないやうに教育して行くことが子供の生活を統制するといふことなのだと思つてゐます。

をはり。

(13頁)

これは石橋の教育意図、指導観が集約的に述べられ、その骨子と本質が滲み出ている文章で

ある。自己の教育に対する考え、これからの指導の方針を慎重に語りながら、あるべき教育に対する信念を率直に親に訴えかけている。即ち、「以前」に述べた、「子供の事をよく考へてくれるやうにといふこと」の真意は、「決して、子供を勝手にさせ或は放任することの意味では」なく、「子供の心を殺さないやうに考慮して正しい教育の目的に向つて統制して行く」ことであるとする。「子供に勉強の大切なことも教へ理解させて学習にも努力させる様に仕向け」、「知つて置かなければならぬやうな規則作法は極力覚えさせるやうに努力します」と石橋はいう。だが一方、「けれども私は子供の眞の姿をも省みないでたゞ子供に必要性のないものまでも惨酷に押しつけたり、強圧しやうとは思ひません」ときっぱりと明言していることに注意したい。

ここに至る行論からも、石橋の考える「統制」とは、教師による、教師に都合のよい一方的な「統制 (control, regulation)」ではなく、それはあくまでも「自治 (autonomy)」という意味であり、それは子ども (たち) の「自己統制 (self-control)」という意味を含み込んでいるものであると読める。石橋は、「子供の心を殺さないやうに考慮」することが「統制」の要諦であると認識しており、「たゞ子供に必要性のないものまでも惨酷に押しつけたり、強圧しやうとは思ひません。」と、「押しつけ」「強圧」の教育を避けんとしていた。そこには「子供」の「必要性」というものがいかに重要であるかについての明瞭な自覚があったと言える。「自治」と「統制」は矛盾しない。実際に、「子供の眞の姿」に立ち、その「必要性」を生み出す方策を「自治」としてとることは、「転任四日間」の中で実行していたことでもあり、その言動、その実践と理念はここでも一致・一貫している。

5. 『花城Ⅰ』の「あとがき」

最後に、この学級文集『花城Ⅰ』の末尾にある文章に付言したい。『花城Ⅰ』の最終頁にある「あとがき」の部分には、石橋自身が子どもたちに向けて書いた次の文がある。

あとがき

石橋勝治

私は皆さんに九月からをしへて、どんなにしてをしへて行つたらよいかと一生けんめいかんがへました。そしてとにかく力ありつたけでみなさんと一しよにべんきやうして行かうと思つたのです。それからはみんなも私も一生けんめいでした。だれもかれも本気でした。つづりかたも讀方も算術もくらしかたもみんなでかんがへてきました。私もみんなに早くよませたい。うんとうんとはげましあつてべんきやうして行きたいと思ひました。そまつですが文集一号がとうとう出来ました。どうぞ私たちみんなのものです。しつかりとほんとうにしつかりとよんで下さい。これをかき終つた時は夜の二時でした。うれしくてうれしくてとびあがる位でした。うんとべんきやうしてもっともっとよいせいとになりませう。十學級がみんななかよくそろつて。

この「あとがき」の文章は、学級の受け持ちになってから『花城Ⅰ』が作られるまでの約一ヶ月の間、石橋が「どんなにしてをしへて行つたらよいかと一生けんめいかんがへ」、また子どもたちと「一しよに」、教科学習や「くらしかた」を「みんなでかんがへ」「とにかく力ありつたけで」取り組んできた学級づくりの力の強さを彷彿とさせる。その結晶である最初のこの文集は「私たちみんなのものです」と言い添え、「うんとうんとはげましあつてべんきやうして行きたい」と、子どもたちに「先生」の「思ひ」を率直に語りかけ、これからも学級を「みんなで」つくり、「みんななかよくそろつて」向上していこうとその意志を伝えている。初め

ての学校で初めて受け持つことになった学級への、期待と希望、心意気が伝わる。「これをかき終った時は夜の二時でした。うれしくてうれしくてとびあがる位でした。」との文からも、初々しくも真直ぐで熱心な、25歳の青年教師・石橋の当時の姿が想像される。なお、「夜の二時」までガリ切りをし、花城で初めての文集を作っていたこの「十月頃」は、石橋家に長女・和子が生まれる前後の多事多端な頃でもあった³⁸⁾。

おわりに——小括と今後の検討課題——

以上、学級文集『花城Ⅰ』の「お父さんやお母さんの部」の記述を中心に吟味・検討し、そこに現れていた石橋勝治の当時の「子供」観・教育観などについて確認してきた。そこからは花城尋常高等小学校赴任当初の、石橋の当時の実践そのものの有り様とそれへの意識、その若々しくも明確たる信念の片鱗をあらためて窺い知ることが出来たようにおもふ。

「お父さんやお母さんの部」の全体は、石橋の「子供」観と教育観、その教育意図と学級経営の方針を、言わば学級通信の如く、学級文集そのものを通して子どもたちの親に伝えようとするものであった。そこには初任らしい新鮮さと謙虚さの一方、自らの大船渡校での4年間の実践に裏打ちされた自信と自負が滲み出ている。そしてそれらの記述は、子どもの文からわかる事実と自己の経験を挙げながら具体的に親に語りかけ問いかけるモノログでもあった。時に静かに「大人は勝手」な考えを捨てるべきと迫り、「自分の子供を悪い道へおとしこ」むのは「自分達である」場合もあるのだと訴え、父母の思考と行動を戒める言葉は厳しく熱いが、その目指すべき教育への意志を訴え、共に子どもの「自立」に向かおうと働きかける文の全体は存外に説得的である。そこに大胆に書きつけられた言葉は、これまでの実践の中で培ってきた、「事実と経験」から恐らく独力で紡いできた教育観であり、決して一人歩きした説教や皮相な躰・子育ての「理論」ではなく、そこに飛躍はない。石橋は、自らの実践という「経験」の中で「事実」を基にそのあるべき正路を見い出しており、理論を理論として語るという態度をとっていなかったことに注目したい。

以下、その他、ここで確認した限りでの、「お父さんやお母さんの部」から見い出される石橋の実践及びその理念の諸特質を、2点に絞って確認しておきたい。

第一に、石橋の、子どもたちの「くらしがよくなるやうにと思つてこしらへた」学級文集の、そのもう一つの作成意図である。石橋は何のために、文集という手段を借りて、それを通して親に自己の「子供」観や教育観を述べたのか。それは、「学校と家庭と子供とが協力してかゝらなければ効果は望めないものである」との考えがあったからであると読める。そこには、教師は子どもと、そして親とともに学級を、教育を創り築いていくものなのだという一つ別の教育観が見える。「大人は勝手」な言動とその思考を反省・転換せねばならぬとあえて親に向けて厳しく書きつけた真の意図もまたそこにあったように思われる。

石橋にとって、文集づくりは学級経営と一体のものであり、生活指導と一体のものであった。そしてその「お父さんやお母さんの部」は、新しい学級の生活指導のための一つの重要な手段であり、実践そのものでもあった。ここに、石橋が学級経営、「生活態度」の「訓練」、そして「自治」の指導の手段として学級文集をつくっていた様が明瞭に窺える。城丸章夫は、「石橋は花城小時代に確かに文集の指導に力をいれ、綴方指導の技術も磨いたことは間違いがないが、石橋にとっての本領は自治の指導であり、綴方はその指導のための手段であり、結果の記録で

もあるという性質を担っていた。』³⁹⁾と的確に指摘する。ただし、『花城Ⅰ』の場合、学級の最初の文集であったということもあり、それは「結果の記録」であったばかりでなく、父母に率直に自己の「子供」観・教育観を告白し、共に子どもを育ててゆかんと呼びかける、挨拶状と御願状を兼ねた学級通信でもあったとともに、石橋が最後の「あとがき」に「うんとうんとはげましあつてべんきやうして行きたい」と書いていた如く、その全体が、学級の子どもたちに共に学級を築いてゆかんことを訴えかける一つの宣誓書ともいべき性格のものでもあったと見る事が出来よう。

学級の子どもたちへの一連の「挑戦」と働きかけの一方、こうした「御家庭」への働きかけを最初の学級文集の中に大きく位置づけるやり方は、赴任当初の「餘りにも無統制な此の學級兒童」を目の前にしての生活指導、そしてその後の学級経営、「自治」の指導のための一つの方途・布石として自覚的・意図的に採られていたものであったといえる。これが『花城Ⅰ』の学級文集づくり、その意図のもう一つの真意であったといつてよいであろう。こうした手段で親に語りかける方法をとっていた石橋は、「ある種の明確な計算と見通し」⁴⁰⁾をもって新しい学級の「自治」の教育に自覚的に臨んでいたものといえる。

第二に、関連して、石橋の「子供」観と教育観に現れていた、子どもの「自立」「自治」という理念の内実についてである。もとより、近代における自由教育とは、政治的その他あらゆる権力による教育への統制・干渉を退け、子どもの自発性や自己活動を尊重し、そして教師の自由を尊重するものであるとするならば、そして、教育における「自由」の本義が、人間の（そして子どもの）理性的な自己決定を保障するところにあるとするならば、ここに見た、石橋の「子供」観や教育観、その実践意図や教育信念の中には、間違いなく「自由教育」の思想原理が流れていたということが確認出来るであろう⁴¹⁾。

「お父さんやお母さんの部」には、その父母への語りかけの内実からしても、一貫して、自主的・自律的な、「自立」した子どもにしたいという石橋の願いが感ぜられる。そこにはまた、子どもを「自立」へと導き育てるために、何故に「自治」を重んずる学級経営が目指されねばならないかが如実に語られてもいた。即ち、教えるべきことは教えるが、それは「子供の心を殺すような「強圧」的な「押しつけ」であってはならない。「子供は子供としての世界があり、親も教師も「子供の眞の姿をも省みないで」、「大人が大人としての完成された考でそのまゝ、その規則を子供に押し賣りすることは危険」である。そも、「子供は自分の力で成す事を好むもの」で、「子供にまかせてやらせれば子供は子供なりにやれるものである」。「ひとりで仕事をさせるとどんどんどこまでも」やる本性を持つ「子供」を信じ、「子供の伸びる力」を信じて、自らの思考・判断に依って行動する、自らを律し皆で決めたことは皆で責任をもって守る「自治」の精神を大切にすること、そこにまた石橋の主張の真意があった。石橋の思考の中で「自治」と「統制」は矛盾するものではなく、両者はほぼ同義のものであったといつてよい。そしてそこには徹底した子ども尊重の理念が内在しており、それが石橋の教育観の中心軸をなしていた。かくして、これらの一見素朴な言葉の中に、戦後石橋の、子どもの自主・自律を重んじ、民主教育に徹する「自治」の教育原理が内在し、その実体が既にそこに明瞭に浮かび上がっていることは頗る興味深い⁴²⁾。

最後に、今後の検討課題の幾つかを確かめておきたい。

第一に、本稿では『花城Ⅰ』の「子供の部」の中で子どもが綴った文について一切触れることが出来なかった。『花城Ⅰ』の全体的特質は、あわせて「子供の部」の作文を吟味するとこ

ろから初めて明らかになる。次稿では、作文の記述内容そのものを検討するとともに、『花城』の他の号についても触れ、石橋の学級文集づくりを通じた生活指導の実態、その「自治」の学級経営の有り様を明らかにしたい。なお、筆者の力不足が故、本稿の中では高橋氏から頂いた多くのお話と示唆を十分に記述、表出することが出来なかった。後の稿にて、高橋氏からの聞き取り内容の詳細を織り込み、それを踏まえつつ、石橋の花城での2年目、1936（昭和11）年度の学級経営実践、尋5文集『花城の子供』の内容、石橋学級の子どもたちの様子や石橋の実践方途の実態にまで踏み込んで検討してみたい。

第二に、石橋が後に『足跡』の中で自ら述べているように、その学級経営や「学級意識」への問題関心は、大船渡時代の特に1934（昭和9）年の末頃には既に明確にあり、その4年間で文集を学級経営に生かす実践を既に行っていた。それらは本稿で見た『花城Ⅰ』の記述の背景をなすものであったろう。花城時代の石橋の「学級文集」実践は大船渡時代の実践の上になされたといえるものであり、その意味で、戦前・岩手での石橋の学級経営実践の意義を根源的に問うためには、大船渡時代の実践、更には石橋の生い立ちや師範学校時代も検討の視野に入れねばならない。これらの作業もまた今後に残された課題となる。

そして第三に、石橋がこのように、「自治」と「協働」⁴³⁾、「生活」を重視する背景には何があったのか。同時代の「生活教育」運動や北方教育運動、集団主義教育論等の潮流とその思潮、等を具体的に検討しなければならない。更に、本稿では立ち入ることが出来なかったが、花城尋常高等小学校の当時の実態とその特質も視野に入れ、同校校長・三田憲のほか、佐藤隆吉ら北方教育、生活綴方運動に携わっていた同校訓導らとのつながりについても今後検討の必要がある。関連して、石橋と、高橋啓吾や永澤一明、吉田農、柏崎栄ら、ほぼ同時代の岩手の北方教師たちとの交流・影響関係をも視野に入れる必要があろう。

而してこれら花城時代・石橋実践の研究は、戦前生活綴方と戦後社会科の結節点、自治・社会性を育てる生活指導と社会科教育とを繋ぐ紐帯を再び見出す作業へと連結するものとなるであろう。

* 本稿作成にあたり、石橋勝治の教え子の一人、高橋俊裕氏には、度重なる聞き取りに応じて頂き、花城尋常高等小学校の昭和10年前後当時の様子、当時の石橋勝治のことや石橋学級についての貴重なお話を頂いたばかりでなく、学級文集や石橋の各種著書等を拝借させて頂き、更に高橋氏ご自身の教職経験についてもお話を頂き、拙論への批正と、今後の教育実践研究のあり方や方向についての示唆・教示を頂くなど、並々ならぬ多大なご配慮と暖かいご指導をいただいた。ここに記して厚く謝意を表したい。

* 本稿は、平成16年度文部科学省科学研究費（若手研究B、課題番号：15730386）による研究成果の一部である。

註

- 1) 石橋勝治の教師時代の著作等の全体とその教育実践の足跡については、『石橋勝治著作集』全7巻（あゆみ出版、1984年）参照。なお、石橋はレッドパージで教職を追われた後、「日本標準」を創業する。
- 2) 社会科教育史研究の領野に関して言えば、小原友行、臼井嘉一、片上宗二らの「石橋社会科」に関する先行研究では、戦後「石橋社会科」実践が、戦前の教育実践の中で「意図しながらも実現できずに残された課題」の実現過程という形をとって進められたものであることが指摘されている。だがそこでは、石橋の戦前岩手での一連の教育実践の検討には立ち入っておらず、その詳細

と特質の吟味が必ずしも十分になされていない。石橋の戦前・戦後の実践の流れの全体の中で「石橋社会科」の生成・展開とその意義を位置付け、再びその戦前の実践史的背景の意味付けを行う作業は、未だ残された課題となっている。小原友行「戦後初期社会科教育実践の研究——石橋勝治の社会科教育実践の場合——」（『広島大学大学院教育学研究科博士課程論文集』第4巻、1978年）98-100頁、臼井嘉一「解説」（『石橋勝治著作集 第6巻』あゆみ出版、1984年、所収。のち、臼井嘉一『社会科カリキュラム論研究序説』学文社、1989年に収録）、小原友行「四谷第六小学校（東京都新宿区）と西多摩小学校（東京都多摩市）の実践——社会問題を軸とする社会科カリキュラム——」（平田嘉三・初期社会科実践史研究会編『初期社会科実践史研究』教育出版センター、1986年、所収）227-236頁、片上宗二『日本社会科成立史研究』風間書房、1993年、570-582頁、小原友行『初期社会科授業論の展開』風間書房、1998年、408-424頁、参照。

- 3) 中野光『中野光教育研究著作選集② 日本の教師と子ども』E X P、2000年、161頁。
- 4) 本稿では、石橋が花城尋常高等小学校に赴任した当初の学級文集の記述の検討に作業を限定するものであり、前任校・大船渡校時代の石橋の「作文教育」と、花城時代の「学級文集」実践との関連性、また花城時代の石橋の学級経営実践の実際等の全体についての詳細な吟味・検討は、後の機会に譲りたい。
- 5) これは同書第2章の表題名である。同書の中での花城時代についての記述は、石橋勝治『戦前戦後を貫く 民主教育実践の足跡』日本標準、1972年（同書は『石橋勝治著作集 第1巻 自治・自主教育の開拓——戦前編——』あゆみ出版、1984年に再録）67-127頁。
- 6) 花城時代の石橋実践の概要と特質については、既に中野光と城丸章夫の優れた論考があり、本研究はその補論的な性格を持つ。城丸章夫「解説」（前掲『石橋勝治著作集 第1巻』、所収）364-366頁、中野光「解説」（『石橋勝治著作集 第2巻 生活と自治の学級経営——戦前・戦中編——』あゆみ出版、1984年、所収）363-369頁、中野光「岩手県における教育実践」（石橋勝治全仕事編集委員会編『石橋勝治 全仕事——理想を求めて——』日本標準、1995年、所収）28-31頁、参照。なお、梅根悟「書評 石橋さんの『足跡』を読んで」（日本生活教育連盟『生活教育』1973年5月）、中野光「新教科＝社会科の教育——石橋勝治の実践と理論を中心として——」（日本生活教育連盟『生活教育』1995年10月。同論文は、「社会科教育の開拓者・石橋勝治」の表題で前掲『中野光教育研究著作選集②』に所収）参照。
- 7) 「学級文集」を、教育実践史研究の中において、その対象として取り扱うことの意味・意義については、船橋一男「学級文集と生活綴方実践史の可能性」（日本教育史研究会『日本教育史研究』第14号、1995年）参照。なお、太郎良信「学級文集・戦前の歴史」（日本作文の会編『戦前戦後・日本の学級文集 別巻 学級文集の研究——生活綴方と教育実践——』大空社、1993年、所収）、志摩陽伍「戦前生活綴方の歴史」（同上）、佐藤広和「戦前生活綴方実践における文集の役割」（同上）参照。
- 8) 白い国の詩編『北方の児童文集』（各県別、全6巻）東京電力、1990-1993年、日本作文の会編『戦前戦後・日本の学級文集』（全20巻）大空社、1993-1994年。
- 9) 高橋俊裕氏は、戦後、遠野市内等の小学校教諭、教頭、校長を歴任し、石鳥谷町立八重畑小学校校長を最後に退職。現在、花巻市内に在住。
- 10) 『石橋勝治著作集 第7巻』（あゆみ出版、1984年）巻末所収の「著者略歴」参照。
- 11) 『足跡』32頁。
- 12) 『足跡』58頁。

- 13) 『足跡』23-66頁。
- 14) 『足跡』30-31頁。
- 15) 花城校の前任校、大船渡尋常高等小学校時代の石橋実践については、第一次史料・関連資料の渉獵・蒐集と吟味が未だ出来ておらず、不明な点が多く、その詳細な検討の報告は後日に期したい。
- 16) 花城尋常高等小学校については、花城会編『花城小学校80周年建碑記念誌 花城小学校此处にありき』花城小学校記念碑建設委員会、1985年、参照。
- 17) 無名子「岩手縣教育界新風景（四）」（岩手縣教育會編『岩手教育』第8巻第1号、1930・昭和5年1月）86頁。なお、吉田六太郎「岩手の生活綴方群像・その歩み」（白い国の詩編『北方の児童文集 岩手編』1993年、所収）623頁、参照。
- 18) 前掲『花城小学校此处にありき』参照。
- 19) 吉田六太郎、前掲「岩手の生活綴方群像・その歩み」627頁、参照。
- 20) 1938（昭和13）年前後の「遠野教育」の基本的性格については、拙稿「昭和戦前期『遠野教育』の実践理念について——遠野尋常高等小學校編『皇民鍊成を目ざす遠野教育の實態』の検討を中心に——」（『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第2号、2003年）を参照されたい。
- 21) 『足跡』128-130頁、石橋勝治・佐々木方・佐々木勇『実践 遠野教育物語——いまに生きる自治の経営と自主学習——』日本標準、1992年、22-25頁、参照。
- 22) 北方教育社編『北方教育』第14号、1934（昭和9）年9月、53-67頁。なお、戸田金一『秋田県教育史——北方教育編——』みしま書房、1979年、336頁、参照。
- 23) 『北方教育』第14号、1934（昭和9）年9月、末尾「編輯室」欄、参照。
- 24) 岩手における生活綴方運動史については、次の一連の研究がある。吉田六太郎「岩手県生活綴方教育運動史」（日本作文の会『作文と教育』1966年12月号）、柏崎栄『ある北方教師』労働旬報社、1970年、阿部真『岩手の教師・その伝統——民研岩手班共同研究——』富士屋印刷所、1979年、『岩手近代教育史 第2巻 大正・昭和I編』岩手県教育委員会、1981年、1446-1486頁、伊藤喜助『教師の群像』杜陵印刷、1983年、吉田六太郎・藤沢靖「岩手の民間教育運動史抄」（教育科学研究会『教育』No442、1984年8月）、吉田六太郎、前掲「岩手の生活綴方群像・その歩み」。ただし、石橋の、県下綴方教師らとの関係について、これら諸研究においては詳細に触れられておらず、以後の検討課題として残されている。
- 25) 雑誌『生活教育』掲載の論文の表題は「轉任四日間」（第1巻第11号、1935・昭和10年11月）であるが、これは同月に雑誌『教育論叢』に掲載の論文「學級に於ける轉任四日間の試み」（第5巻第34号、1935・昭和10年11月）の記述の一部を抜粋・略述しているものであり、実質的に両論文はほぼ同様の記述内容である。ここでは後者から引用する。
- 26) 高橋氏によれば、石橋の赴任当初、学級は「くされわらす」ばかりの男子学級で、病気休職等により途中で数人の先生が入れ替わり、補欠授業の連続であったという。そうした中で、「学級は石橋によって、子どもたち自身の力でやり抜けるように導かれた」と高橋氏は回想する（2002年9月21日聞き取り）。
- 27) 石橋勝治「學級に於ける轉任四日間の試み」（『教育論叢』第5巻第34号、1935・昭和10年11月）78-79頁。
- 28) 同上論文、81頁。
- 29) 中野、前掲「解説」363-364頁、中野、前掲「岩手県における教育実践」29頁。

- 30) 『足跡』 67-127頁。
- 31) 『足跡』 72頁。高橋氏の保管資料には『花城Ⅰ』の奥付部分はなく、発行月日は不明である。なお、『花城』 2号の発行は12月である。
- 32) 高橋氏保管資料では「子供の部」の最終頁はなく、その最終頁数は不明である。
- 33) 高橋氏の保管する文集『花城Ⅰ』は、菅原氏が保管する文集（の一部）を複写したものであり、その「子どもの部」については、高橋氏の当時の作文が掲載された部分の複写が現存している。本稿では紙幅の関係上この「子どもの部」の作文の検討に立ち入ることができなかった。後の稿に読みたい。
- 34) 千葉春雄「文集談議」（『教育・国語教育』第6巻第1号、1936・昭和11年1月）188頁。
- 35) なお、『花城の子供』5号の中に記されている、「この文集の使い方 <文集の編しゅう委員から>」の文章は、『足跡』92-93頁に収められている。そこでは、文章の主語が「僕達」に変わっており、編集委員の子どもたちが、自分たちの文集の使い方を記すという文体となっている。また、『足跡』には収められていない、石橋学級の最後の文集『花城の子供』9号にある「この文集の使ひかた」については、中野、前掲「解説」364頁、参照。
- 36) この「ひょっきり」という表現は、相撲等の世界で使用されている用語「初切（しゅっきり）」の意であろうと解される。この言葉は、言わば冒頭の「緒言」という意味合いのものと推察される。
- 37) 「ちようす」（「ちよす」）は東北地域の方言で、<かまう><いじる><触わる>の意。
- 38) 『妻の生涯』日本標準、1974年、参照。
- 39) 城丸、前掲「解説」365頁。
- 40) 高橋氏の指摘による（2002年9月21日聞き取り）。
- 41) 中野光『大正自由教育の研究』黎明書房、1968年、中内敏夫「自由教育」（民間教育研究会編『民間教育史研究事典』評論社、1976年、所収）参照。
- 42) 石橋勝治『學級經營の方法——ガイダンスの問題をふくめて 小学校篇——』新日本教育社、1950年、参照。
- 43) 野村芳兵衛『生活訓練と道德教育』厚生閣、1932（昭和7）年。なお、中内敏夫『生活綴方成立史研究』明治図書、1970年、参照。